

小・中学校社会科研究部

I 研究主題

主体的・協働的な学びを通して、多様な考えを引き出す授業

—社会科好きを育てるための魅力的な問いを求めて—

II 主題設定の理由

文部科学省教育課程企画特別部会が出した論点整理では、育成すべき資質・能力について「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」が三つの柱の一つとして挙げられている。社会科を暗記教科と感じている児童生徒が多い中で、主体的に取り組み、必要性を感じて課題に向かわせる授業を研究していくことを目的に本研究部の主題を決定した。特に、樺山先生の講演で示された「習得・活用・探求」の三つのアプローチの中で「意味ある問いで学びを見通す」ことに焦点を当てた。

本研究では、主体的に学ぶ社会科好きの児童生徒を育てるために、日々の授業における発問の仕方や問いを立てる工夫を重点化し、授業実践を通してその事を検証していくこととした。

そこで本研究部が考えた仮説が以下のとおりである。

【仮説1】学習意欲の高まる問いが立てられれば、児童生徒は主体的に授業に参加するだろう

【仮説2】多様な考えを引き出せる問いが立てられれば、児童生徒の思考が深まるだろう

導入部分で学習問題・課題¹に対する関心を高めることを目的とした問いを提示することで、自分と課題を結び付け、学んだことを活かそうとする意欲につながると思う。また、展開部分の問いでは様々な考え方や資料に触れさせ、対話的な学びを通して児童生徒の思考を深めることをねらいにしている。

III 研究の内容

1 研究の方向性

主題設定の理由で述べたとおり、本研究部では二つの仮説を立て授業内容に反映させていく。

【仮説1】学習意欲の高まる問いが立てられれば、児童生徒は主体的に授業に参加するだろう

手立て① 児童生徒の関心を高めるための資料の作成

写真資料や動画、地域で配布されているパンフレットなどを活用することで、学習問題・課題を身近なものとして捉えさせ、それに取り組もうとする前向きな姿勢につなげていく。また、その資料を通して児童生徒が授業の初めの段階で学習問題・課題を把握する手助けになるように提示していく。

手立て② 「なぜ?」「どのように?」などの疑問詞を用いた問いを立てる

導入部分において資料を見る中で、児童生徒の中から出てきた疑問を学習問題・課題として設定することにより、教え込みではなく自分たちで考えていこうとする意欲が高まると考える。そのことによりその後の調べる、話し合うことに意味を持って取り組むことにつながるだろう。

¹学習指導要領解説（社会編）指導計画の作成と内容の取扱い1指導計画の作成上の配慮事項（3）における、小学校では「学習問題に対して解決の見通しを立て…」中学校では「適切な課題を設けて行う学習」に則し、校種に応じて区別する。

手立て③ 見通しを持った単元計画の作成と児童生徒への明示

教師が単元を通して身に付けさせたい力を設定することで、計画的に児童生徒に指導することが可能になるだろう。そして、それを児童生徒にも目に見える形で提示することによって、学習活動を自ら振り返り、その成果を次の学習へとつなげていこうとする意欲が高まると考える。

【仮説2】多様な考えを引き出せる問いが立てられれば、児童生徒の思考が深まるだろう

手立て① 問題解決のための展開の工夫

問題解決型の授業を展開するための問いを工夫する。アンケート結果から自分ごととして捉えさせるような流れや、例えば将来自分が家を建てるという設定（主に中学校での実践）を生徒に投げかけ考えさせる。まずは個人で課題に対する意見を考えさせることで、その後の意見交換の場で多様な考えを引き出すことにつながると考える。

手立て② 言語活動を取り入れた授業展開

他者の考えに触れたり、様々な資料を読み取ったりする作業を通して自らの考えを広め、深めていく学びへと発展させていく。学びの過程の中で、個で考えた意見を他者との対話によって多面的に捉え直す機会があれば、思考がより深まると考えた。小学校の実践では市役所職員にゲストティーチャーとして来ていただき、中学校の実践では少人数グループによる情報共有や意見交換の時間を設定する。

2 研究の経緯

本研究部では7月に先行授業を行い、それをもとに小学校、中学校それぞれ1回ずつ同じ「防災」の単元で授業実践を行った。また、児童生徒の実態や変容を捉えるために事前にアンケートを取り、授業で活用したり検証したりするためのデータとした。

3 小中の接続・関連を図る

今回の研究では、小中学校の学習内容の接続・関連を視野に入れ、「防災」の単元を設定した。自然災害が多い日本では災害が起こるたびに、それに対する備えの必要性が叫ばれている。自分ごととしてとらえるべき課題だと感じさせることと、学んだことを活かしてよりよい社会の創り手を育成していくことを目的としている。その際に小学校、中学校の発達段階に応じて同じような写真資料をどのように活用していくかも検討していく。

IV 実践例

実践例① 小学校第5学年（学習活動における児童の様子からの考察を含む）

単元名「わたしたちの生活と環境」 小単元名「自然災害を防ぐ」

1 本時の目標

自然災害を防止するために所沢市が様々な対策や事業を進めていることを知り、自然災害の防止のために自分にできることを考える。（社会的な思考・判断・表現）

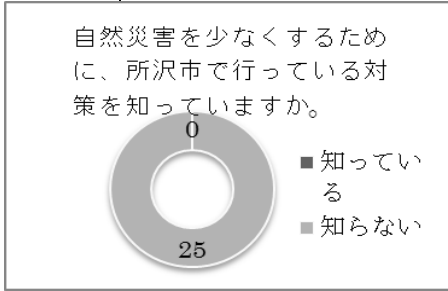
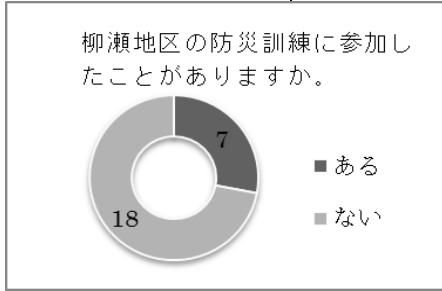
2 資料 ※【仮説1】手立て①

所沢市の備蓄品 柳瀬地区のハザードマップ 防災ガイド・避難所マップ（所沢市版）

3 本時の展開

学習活動	学習内容	評価と指導の工夫	資料・準備
1 前時の振り返り	○自然災害の確認 ・地震 ・津波 ・台風 ・竜巻	○日本は自然災害が多い国で、1年中災害に直面する可能性があることを思い出させる。	

<p>2 8月22日に所沢市で起こった台風による被害について知る。</p> <p>3 柳瀬地区で行われている取り組みを知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・洪水 ・土砂くずれ ・台風の被害状況 <ul style="list-style-type: none"> ・総合防災訓練 ・各地区自主防災活動訓練 ・防災ガイド ・避難所マップ ・ハザードマップ 	<p>○映像や写真で、自分たちの住む地域の災害時の被害状況をつかませる。</p> <p>○事前のアンケートより、市や地域の防災対策や訓練が行われている事実、にも関わらず自分たちの災害への意識の低さに気付くようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュース映像 ・新聞記事 ・事前のアンケート結果（資料1） ・訓練時の写真 ・所沢市防災ガイド、避難所マップ
--	---	--	---



[資料1]

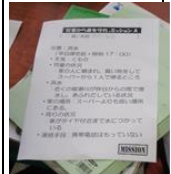
4 本時の学習問題をつかむ。

自然災害から身を守るために、自分たちにできることはどのようなことなのだろうか。

5 「災害から身を守れ」ミッション（資料2）に取り組む。自分だったらどうするかをイメージする。
[ミッションの内容]

- ・災害状況の理解
- ・自分なりの危険回避方法を模索
- ・地震時の対処法
- ・洪水時の対処法
- ・台風時の対処法

○写真やハザードマップ、ミッションの状況に関わる資料を見ながら、自分なりの危険対処法を考えさせる。



資料2

洪水設定例

- (平日帰宅前・時刻 17:00)
- ・天気：くもり
 - ・児童の状況：家の人に頼まれ、買い物をしてヤオコーから1人で帰るところ
 - ・洪水：近くの柳瀬川が昨日からの雨で増水し、あふれだしている状況
 - ・家の場所：ヤオコーよりも低い場所にある
 - ・周りの状況：車がタイヤ付近まで水につかっている
 - ・連絡手段：携帯電話はもっていない

地震設定例

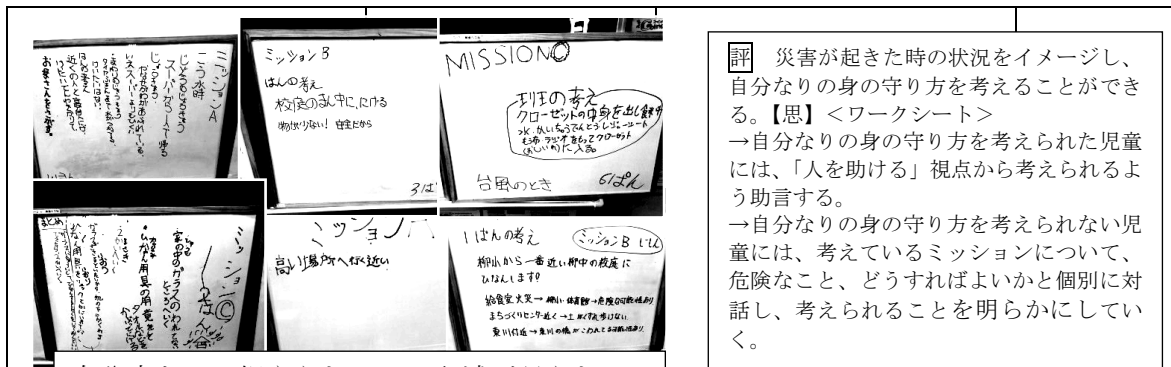
- (平日下校前・時刻 16:00)
- ・天気：雨
 - ・児童の状況：全員昇降口を出た直後
 - ・地震：震度6強
 - ・給食室から火災発生
 - ・学校前のオリンピック道路：揺れの影響で信号が倒れ、車同士の衝突事故が発生
 - ・学校南門：まちづくりセンター近くのトラックから土がこぼれ、まともに歩けない状況

台風設定例

- (休日中・時刻 13:00)
- ・天気：雨
 - ・児童の状況：家で1人で留守番をしている
 - ・台風：今年一番の勢力（雨風ともに）
 - ・家の状況：強風でリビングの窓ガラスが割れてしまった
 - ・家族：夕方17:00まで帰って来ない
 - ・家の外：豪雨で外に出られる状態ではない
 - ・家の中：強風で電線が切れ、停電してしまった

ミッションに対して、一人で考えた後に班でその考えを持ち寄り、深める。





評 災害が起きた時の状況をイメージし、自分なりの身の守り方を考えることができる。【思】<ワークシート> →自分なりの身の守り方を考えられた児童には、「人を助ける」視点から考えられるよう助言する。 →自分なりの身の守り方を考えられない児童には、考えているミッションについて、危険なこと、どうすればよいかと個別に対話し、考えられることを明らかにしていく。

自分事として捉えられている記述が見られる。

6 各班の発表後、市役所危機

- ・市や地域の災害対策
- ・防災意識について

○市役所危機管理課職員の話から、一人一人が災害から身を守ることを自分事として捉えさせる。



ゲストティーチャーより、防災に対して「共助から近助」の大切さの話があり、児童は熱心に耳を傾けていた。



自然災害の際にとるべき行動をまとめ、防災に関する情報などに関心をもつことが大切であることに気付かせた。

7 自然災害が起こることを想定して、何をしておくことが大切かを考える。

まとめ
自然災害から身を守るために、近所の人より仲を深めるときに協力できるようにする。家の人と決めるものを決める。(集まる所、など)

まとめ
自然災害から身を守るために、自分で決断して、自分の命は自分で守る

まとめ
自然災害から身を守るために、7月より防災意識を高め、自分勝手な行動も止む。お母さんやお父さんと一緒に決めて決める。

今日の学習を通して、学習問題に対する自分の考えをまとめ、日ごろから防災意識を高めることが大切であることをつかませた。

8 本時の学習の振り返りと次時の予告をする。

まとめ 自然災害から身を守るために、災害時にどのような行動をとるべきか、一人一人が防災意識を高めていくことが必要である。

4 成果

【仮説1】学習意欲の高まる問いが立てられれば、児童生徒は主体的に学習に取り組むだろう

・「日本はなぜ自然災害が多いのか」という根拠を、国土の地形・自然条件など既習事項を毎時間繰り返し、地図や資料で示したことで児童に「日本は自然災害が多い」という事実をつかませることができた。

・導入時に平成28年8月22日に起こった台風9号による柳瀬川の氾濫の動画(資料3)や自然災害に対する事前アンケートの結果を提示したことで、児童により身近で必要性のある学習課題を立てさせることができた。



・事前アンケートの結果[資料1]自然災害から自分の身を守る具体的な手段を知らない児童が多数であること、自分たちの住む所沢市が行う防災対策を児童全員が知らなかったことで、児童は危機感を感じていた。このことから学習意欲を高める問いを考えることに有効であった。

【仮説2】多様な考えを引き出せる問いが立てられれば、児童生徒の思考が深まるだろう

・事前に、教師が設定した災害（台風・洪水・地震）が発生したときの天気・時間帯・児童の状況・周りの様子などの自然災害発生時の状況設定を用意した。これを児童に提示し、本時の課題に対して多様な考えを引き出すことができた。

・ゲストティーチャー招聘に際し、教師側の意図を伝えると共にグループ学習時に各グループに関わっていただくこと、「自分でできること」「所沢市としてこれだけは伝えたい」という項目をしぼり、綿密な話し合いを行った。児童は危機管理課の方の話真剣に聞き、防災意識を深めることができた。

・ゲストティーチャーとして所沢市役所危機管理課職員を招き、各グループが考えた意見をその場で評価してもらった。専門的な立場から自然災害における話を聞いたことで、児童の思考がさらに深まった。



ミッションを具体化、かつ児童にとって地域における身近な情報を提示したことで、「問い」を自分ごととして捉えさせることができた。

5 課題

・本小単元のように自然災害を扱う場合は、学級（学年）に実際に自然災害で被災した児童がいた場合は、問いを立てる際に配慮が必要である。より身近で必要性があり、かつ学習意欲が高まるような問いをどのような形で立てさせるかは、検討する必要がある。

・ゲストティーチャーを招く場合、授業の時間内で収まるように時間配分を工夫しながら、展開を考えることが難しかった。

・東日本大震災で親族を失った児童がいた。災害発生時の映像・写真等を示し、自然災害への怖さを伝えることも大事であったが、活用の仕方について配慮していくことはより重要である。

・実際には、所沢市は自然災害がほとんど起こらない地域である。防災意識を「自分ごと」に捉えさせていくためには、危機管理課職員の話にもあった「近助（近くの人と助け合う）」という考えを授業外の場面でも伝えていく必要がある。児童はミッション（教師が考えた架空の設定）に対して友達と話し合い、考えを出すことができていた。本単元を進めるにあたり、得られた知識がバラバラになり、事象がつながらなくなってしまう場面があったので、「教師側のゴール」を明確にしておかなければならない。

実践例② 中学校第1学年



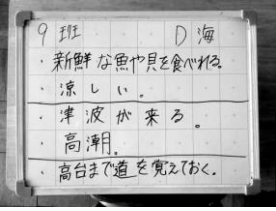



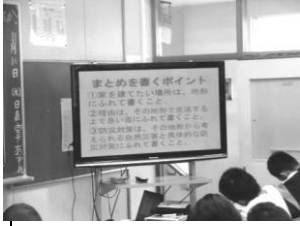
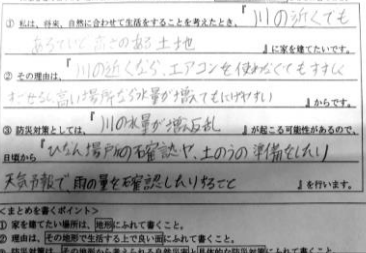
単元名「世界から見た日本の自然環境」 小単元名「自然災害と防災への取り組み」

1 本時の目標

自然に合わせて生活をする視点から、立地場所で生活する上での良い点や悪い点、防災対策について多面的・多角的に考察し、表現している。【社会的な思考・判断・表現】

2 本時の展開

学習活動	・学習内容	●指導上の留意点 評 評価	・資料
<p>1. 写真から日本に見られる様々な自然災害をとらえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 写真①「台風」(資料4) 写真②「津波」 写真③「噴火」 写真④「地震」 写真⑤「大雪」・写真⑥「洪水」 	<p>・日本の災害</p>	<p>●災害は、人々の生活に大きな影響を与えることに気付かせる。</p> <p>●日本の自然環境と密接に関係することをつかませる。</p> <p>●日本は自然災害が多いことを認識させる。</p>	<p>・国内で起きた自然災害の写真</p> <p>・日本全国地形図(掛図)</p>
<p>導入での写真資料は、小学校と概ね同様の資料を活用し、小学校の学習内容との関連を図る。</p>		<p>資料4 (一部抜粋)</p>	
<p>(導入時の様子)</p> 	 <p>③</p>	 <p>①</p>	 <p>②</p>
<p>導入時に、東川の氾濫による冠水(H28.8.22)の資料⑥を提示したことで、身近に起きた自然災害を目の当たりにし、またここ数年の自然災害の様子から自分ごととして受け止め、主体的に取り組もうとする態度が見受けられる。</p>			
<p>2. 本時の学習課題をつかむ。</p>	<p>あなたは、将来、自然に合わせて生活することを考えたとき、どのような場所に家を建てますか。</p>		
<p>3. 「立地場所」の資料を参考に、どこに家を建てたらよいか理由を含めて書く。(個人)</p> <p>A：火山 B：山 C：川 D：海</p>	<p>・自然環境の視点 ・自然災害の視点 ・防災の視点 ・持続可能な生活としての視点</p>	<p>●写真を大型テレビで拡大して提示することにより、生徒が候補地の立地場所を容易に比較できるようにする。</p>	<p>・大型テレビ ・ワークシート</p>
	<p>立地場所を視覚で捉えさせるための鳥瞰図</p>	 <p>●それぞれの立地場所で生活する上での良い点と悪い点を考えさせ、総合的に見てどこに建てたらよいか考えるようにアドバイスをする。</p>	

	<p>※【仮説2】手立て① まず個で考え、根拠を持てるようにする。机間指導を行い、学習内容の三つの視点で考えさせるようにした。また、視覚に訴える資料を用意し、一人一人が考えを持てるよう支援した。</p>	<p>資料5 防災ガイド 避難所マップ</p> 	
<p>4. それぞれの立地場所で生活する上での良い点と悪い点、必要な防災対策を班で考え合う。(班)</p>  <p>9班 D海 ・新鮮な魚や貝を食べられる ・涼しい ・津波が来る。 ・高潮 ・高台まで道を寬めておく。</p>	 <p>●それぞれの立地場所で生活する上での良い点と悪い点、必要な防災対策を考えさせる。 ●話し合いでは、相手の考えを認めながら自分の意見を反映できるようにする。 ●班内の役割をあらかじめ決めておくことで、話し合いの進行を円滑にする。</p>	<p>小学校との関連と、地域の取組に関心を持たせるために活用する。</p> <p>・ホワイトボード</p>	
<p>5. それぞれの立地場所で生活する上での良い点と悪い点、必要な防災対策を班ごとに発表する。(全体)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境の視点 ・自然災害の視点 ・防災の視点 ・持続可能な生活としての視点 <p>※【仮説2】手立て② さらに全体場で、多様な考えに触れ、学び合いを通して一人一人の防災意識をより高められるようにした。</p>	<p>●発表者の台詞の話型を大型テレビで拡大して提示することにより、発表者が見通しをもって発表しやすいようにする。</p> 	
<p>6. 各班の発表を踏まえて、再度個人で立地場所について考える。(個人)</p> 	 <p>※【仮説1】手立て③ 本時の学習をまとめるにあたり、その視点を提示し見通しを持たせることで、生徒は考えを焦点化することができる。</p>	<p>●各班の意見をもとに再考する時間を確保する。 ●他者の考えを生かして、多角的な視点からよりよい立地場所について考えられるようにする。 ●まとめを書くポイントを大型テレビで拡大して提示することにより、生徒が考えやすいようにする。 ●本時の目標である「自然に合わせて生活する視点」を重点とし、自分ごととして捉えることができるよう提示資料等で支援する。</p>	
<p>※【仮説1】手立て③ 本時の学習をまとめるにあたり、その視点を提示し見通しを持たせることで、生徒は考えを焦点化することができる。</p> 	<p>※【仮説2】手立て② さらに全体場で、多様な考えに触れ、学び合いを通して一人一人の防災意識をより高められるようにした。</p>	<p>【評】 自然に合わせて生活をする視点から、立地場所で生活する上での良い点や悪い点、防災対策について多面的・多角的に考察し、表現している。</p> <p>【思考・判断・表現】(ワークシート)</p> <p>< Bの生徒への手立て > 立地場所(地形)から考えられる防災対策を確認させる。</p> <p>< Cの生徒への手立て > 立地場所(地形)で生活する上での良い点や悪い点を確認させる。</p>	
<p>まとめ方を習熟させるために、文頭や文中に一程度を記述しておく。(中学校の活用事例)</p>			

●その土地の良さや課題を踏まえた防災対策事例

	生活する上で良い点	生活する上で悪い点	必要な防災対策
A	<ul style="list-style-type: none"> ・温泉が近くにある ・水が豊富 ・農作に適した肥沃な土壌あり ・自然が豊か 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>噴火による火山灰の被害あり</u> ・道路の見通しが悪くなる ・洗濯物が外に干せない ・農作物への被害が大きい 	<ul style="list-style-type: none"> ・防塵マスクの用意・着用 ・防塵ゴーグルの用意・着用 ・灰を建物内に入れない ・皮膚に灰を触れさせない ・食料や生活用品の備蓄
B	<ul style="list-style-type: none"> ・緑が多い ・空気がきれい ・動植物と触れ合える ・夏場は涼しく過ごしやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>土砂崩れが起きる可能性あり</u> ・野生動物による被害の可能性あり ・虫が大量に発生 ・急な天候の変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・危険な場所を点検する ・避難訓練に参加する ・ハザードマップで避難所を確認 ・土砂災害警戒情報や雨量の情報に注意する
C	<ul style="list-style-type: none"> ・景観が良い ・河原遊びができる ・夏場は涼しく過ごしやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>大雨による洪水の危険性あり</u> ・虫が大量に発生 ・湿気が多く、カビが発生しやすい ・川が放つ異臭あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な雨水ますの清掃 ・日頃からの排水施設の点検 ・土のう、止水板の準備 ・大雨洪水警報に注意する
D	<ul style="list-style-type: none"> ・景色がきれい ・海で遊べる ・新鮮な魚介類が食べられる 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>津波による被害の可能性あり</u> ・金属がさびやすい ・風が強い(砂が家に入ってくる) ・夏場の観光客による渋滞 	<ul style="list-style-type: none"> ・津波注意報に注意する ・避難訓練に参加する ・地形図で高い場所を確認 ・小さな地震の揺れでも避難を最優先

3 成果

【仮説1】学習意欲の高まる問いを立てられれば、児童生徒は主体的に学習に取り組むだろう

・授業の導入では、日本で起きている自然災害の写真を提示することによって、生徒の関心意欲が高まり、導入における主体的に取り組む姿勢が見受けられた。(導入時の様子の写真参照)

・「将来、自然に合わせて生活をするを考えたとき、どのような場所に家を建てますか」という問いを立て、さらに生徒に火山・山・川・海のすべてが組み込まれている架空上の鳥瞰図を示すことで明確にイメージを持たせた。このことにより、生徒は、立地場所を「地形」という視点から、将来家を建てるならどこがよいかということ具体的に考えることができたと考える。

【仮説2】多様な考えを引き出せる問いを立てられれば、児童の思考が深まるだろう

・選んだ立地場所において、生活する上での良い点、悪い点、防災対策を考えることのできる問いを投げかけ、それぞれの「地形」に対して、個人で考えた意見を出させた。その後、生徒はグループで交流することで、多様な考えを共有することができた。

・思考を深めさせる資料として、「所沢市防災ガイド・防災マップ」(資料5)をそれぞれの地形に合わせたページを抜粋してグループに渡したことで、資料を読み取り、自分たちに足りない視点などにも気付かせることができた。自分の意見を付け加えたり、書き換えたりと試行錯誤を繰り返したうえで、全体での情報の共有を行った。その後のまとめの文章では、立地場所をより詳しい理由とともに書くことができたので、生徒の思考が深まった問いと授業展開であったと考えられる。

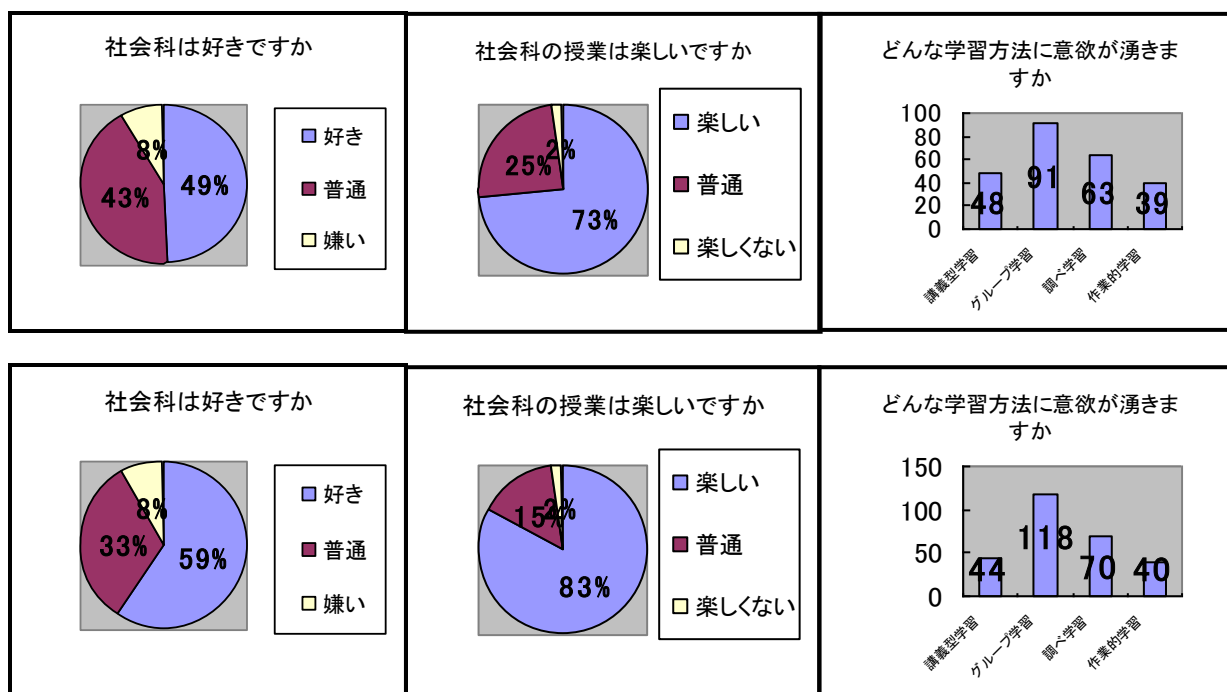
4 課題

- ・授業後の反省で『自分が不動産屋だったら、お客さんに家を売るときにその立地の防災対策についてどう説明するか』という内容の方が考えやすいのではないかと意見が出たので、展開の内容については改良の余地がある。
- ・班での話し合いの際、ハザードマップなどを用意したが、テーマによっては考えの手立てとなる資料を用意するのは難しく、今後の課題となった。
- ・火山・山・川・海の全てがそろった地形図が身近な地域の範囲ではなかったため、架空上の鳥瞰図を作成することが困難であった。
- ・各立地場所で生活する上で良い点、悪い点、必要な防災対策を班で考えさせる中で、単元を中心とする防災対策の内容が薄くなってしまったので、考える時間を十分に確保する必要があった。

V まとめと課題

1 成果

(1) アンケート結果（中学校における調査）[上段7月：下段12月に実施]



(2) アンケート結果からの考察

「社会科は好きですか」「社会科の授業は楽しいですか」の問いに対しては、10%増となり授業改善が図られたことが要因となっていることが伺える。その理由としては、本研究部で取り組んだ、社会科好きを育てるための手立てのひとつである「言語活動を取り入れた授業展開」が考えられる。特に、児童生徒間における協働的かつ対話的な学びによって、社会科に対する主体的に取り組む姿勢を醸成できることがつかめた。

【仮説1について】

- ① 導入の段階で、児童生徒に身近な資料を作成し、大型テレビ等に画像や動画を映し出すことで興味関心を引きつけることができた。自分たちの行った防災に関するアンケートを資料として提示することで、自分たちの防災意識の低さを実感させ、「考えなければならぬ」という気持ちにさせることができた。また、ゲストティーチャーとして所沢市役所危機管理課の方を招いて話を聞いたり、考えを評価して頂いたりする

ことは、生徒が主体的に課題に取り組み、防災に対する関心を高める良い機会になった。このような取組を通して、自分たちがこれからも生活していく地域を、自分たちで守っていこうとするESD（持続可能な開発のための教育）の視点を身に付けさせることができた。

- ② 自分たちの身近に起こりうる災害を想定し、「災害にあったときにどのように行動すればよいのだろう。」「自然災害に合わせて家を建てるならどのような場所に建てるか。」という課題を立てた。その課題に対して自分ごととして、その土地にあった防災対策を考えることができた。
- ③ 国内における自然災害や、岩手県釜石市を特化した防災について学習した後に本時に入ることで、自分ごとに考えやすい流れの単元計画を作成できた。日本の地形や気候の学習をして自然災害の学習につなげることで、日本は自然災害が多く、「いつ遭ってもおかしくない災害に自分たちがどう対応するか」という児童生徒の思考過程に沿った単元計画を作成することができた。

【仮説2について】

- ① ペアやグループでの話し合い活動は、それぞれの意見を活かしてさらに高いレベルの意見を引き出すものになった。「ミッション」という形で問題解決に取り組ませることによって、自ら考えることや意見交換による理解や深め合いが主体的に行われていた。班で話し合うときの役割を決めておくことで、主体的に円滑な話し合いをさせることができた。
- ② ペアやグループで話し合う時間を多く設けたことにより、一人一人が考えていた意見とは違った新しい意見が生まれることもあった。また、班の考えを全体に発表する時間を設け、多くの意見に触れることで児童生徒の思考は深まった。発表の際に話型をある程度決めておくことで、話し手は話しやすく、聞き手も聞きやすい発表をさせることができた。

ワークシートにしっかりと文章で書かせることによって、自分の考えを一人一人に持たせることができた。また、まとめを書くポイントを提示することで、書くことが苦手な児童生徒も意見を書くことができた。

2 課題

【仮説1について】

- ・住んでいる場所によって身近に感じさせることが難しい災害もあり、そのような災害の防災対策を考えなければならないという危機感や必要性を感じさせることは困難であった。
- ・既習事項や提示された資料から児童生徒の疑問や気づきをもとに、学習問題・課題を設定していく展開をさらに工夫していくようにする。
- ・単元を貫く学習問題・課題の解決のための単元計画をより具体化することが必要である。

【仮説2について】

- ・児童生徒が自ら考え、活動したくなる、「興味関心を引く問い」と「ねらいや課題解決につながる問い」の二つの視点を兼ね合わせた、さらに魅力的な「意味ある問い」を追究していきたい。

今後は、児童生徒がこれからの変化の激しい社会を生き抜くために、社会科の授業を通して論理的思考力や問題解決力を身に付けさせるための指導方法のさらなる研究が必要であると考える。

【参考文献】

教育課程企画特別部会 論点整理（文部科学省）平成27年8月